



忘れていたポップス

大塚 伸也*

年も改まり卒論研究追い込みの時期、今年もまた血走った学生諸君の顔が拝見できるようになった。古今東西、眠気ざましに一杯のコーヒーと音楽は不可欠のものらしく、夜も更けると、どこかの研究室からともなくポップス（外国の軽音楽）のサウンドが響いて来る。しかし私の部屋の学生さんは、30歳の半ばを過ぎた老人に対する気配りと言うべきか、ラジオのスイッチも入れずに辛抱してくれている（その代わりに皆、コーヒー中毒にかかっているようではあるが）。おかげで近頃、ポップスとはすっかり御無沙汰していた。

健康のためとか何とかこじつけて、今年の正月は寝正月を決め込んでいた。いざ暮から正月とこたつの中にいると、子供の相手よりは楽だが、これはこれで結構しんどい。所在なくテレビのチャンネルを回していて、NHKTVの“ビートルズのすべて”と遭遇する。ビートルズの生い立ち、下積み生活、成功そして挫折、と彼らの知られざる一面にスポットをあて、ドキュメンタリーで訴えるこの放送を見ているうちに、いつしか胸の高なりを覚え私は高校の青春時代へと連れもどされていた。彼らが活躍した1960年代、日本の経済発展は所得倍増政策の下に目覚ましいものがあり、巷は新幹線のテスト運転の成功、東京オリンピックなどの興奮に包まれていた。テレビが急激に普及したのもこの時期である。このような雑踏とは裏腹に、戦後のベビーブームに生まれた者の宿命として、私は苛酷なる受験戦争に巻き込まれていた。楽しみはというと、勉強の合間に聞くラジオ音楽ぐらいであった。後に幸運とわかるのだが、その時期はポップスのルネッサンスとも言うべき時代でもあったのだ。その筆頭は無論、ヒットチャ

ートを独占していたビートルズである。生来の天のじゃくである私は、ラジオのスイッチをひねると耳に入る彼らの音楽に嫌気がさし、まったく異なるタイプのサウンドを好みとしていた。日毎に音楽性が変化する時代であり、サウンドの進化を一日一日予測するのがいつのまにか私の楽しみの一つになっていた。グループ間の創造性に共通点を見つけたりして悦に入っていたのは私一人ではないのではないか。現在第一線で活躍する作曲家、作詞家には私と同世代の人が驚くほど多い。未熟なる分野は一見無駄な苦勞を強いる代わりに、天才をも作りあげてくれるものらしい。

学部4年になると迷わず発足して間もない研究室を選ぶ。そしてひょんなことから、そのまま助手として残ることとなる。田舎の友人は一樣に、勉強嫌いの私が大学に残ったことに驚きを示したものだ。しかし今考えると、高校時代の経験はそのまま研究者としての実践でもあった。研究を始めた当初は、自分のまずい実験をさしおいて、他の研究者の成果を議論したり、次に出版されるであろう論文を予測したりすることが楽しみの一つであったから。しかしビートルズがそうであったように、興味は次第に自分自身の研究の世界へと移ってきた。私が一貫して念じていたことは、

- (i) 独自性を持つ実験および研究。
- (ii) 得られる研究成果が後世の人に見当る現象として受け取られること（これこそが真理だ）。
- (iii) 研究成果に血のにじむような苦勞が滲み出ていること。

これらの研究態度は今でも正当であると信じている。しかし私の能力と相まって、言うは易し、行は難しであったし、第一、若さを持続させるにはよくなかった。そのうち、音楽を

*大塚伸也 (Shinya OTSUKA), 大阪大学, 工学部, 冶金工学科, 幸塚研究室, 工学博士, 非鉄製錬

聞くという余裕もどこかへ行ってしまっていた。

1981年の秋から1年半、アメリカ、ウィスコンシン・マディソン大学の Chang 教授の下で研究することとなる。戦後の自由なる教育を受けた私は自分自身が日本人であるという意識をあまり持たずに育った。外国のポピュラーソングを聞いたり、英語で論文を書いたり、至極当然のように思っていた。Chang 先生のスタッフは質、量ともに豊富であり、白人学生の K 氏、R 氏、パキスタン人の N 氏、中国人の Z 氏、KC 氏などで研究室内は活気に溢れていた。当初彼らには、私が母国に対する誇りを持っていないように写ったらしい。私がアメリカ、ヒューレットパッカート社製の電卓を愛用している。日本語ではめったに論文を書かない、等々。私がビールの席でついポップスを口づさんだりすると軽蔑のこもった表情を示しさえした（と私は思った）。これでは私と言えども日本人であることを過剰に意識してしまうのではないか。

ある夜、私の部屋で K 氏と R 氏がラジオから流れる乾いたなつメロポップスに聞き入っていた。私が入っていくと照れ臭そうに、「この曲知ってるか?」「ダウタウン。ペトゥーラ・クラーク。」と私。そしてまずい英語で、育った環境は似たようなものであることを説明した。もう、金色の口髭をなで上げる K 氏自慢のポーズにも、R 氏の部屋の割れんばかりに鳴り響くポップスにも憶することなく堂々と鼻歌交じりにやり取りできる。その後、気のいい彼らとピザを食べながらチェスやよもやま話をするのが毎金曜深夜の日課となった。一見バカバカしいことをやり出すと自然と実験にも集中心が出てくるものである。帰国する頃には研究の方も何とか格好がついていた。それにしても有り余る自然を持ち、映画、音楽、演劇と格安でお茶代わりに楽しめるアメリカの人達は幸せである。物価高の日本においてはこの若々しき興奮は長くは続かず、そのうち日常の研究雑事に埋没し

てしまった。

私は元来、2、3年前の出来事でも懐かしがるのは好きではない。それが放送を見ていて不覚にも、回想は高校時代にまでもさかのぼってしまった。研究者の宿命として、なぜそうなったのかをつい考えてしまう。“ビートルズのすべて”は彼らの永遠の課題が“愛”であったことを繰り返し訴えていた。私はこれを自分自身に対する愛、つまり、残された人生を愛することができるかどうかという問いかけに換えてみた。

いま日本は否応なしに高齢化社会へと突き進んでいる。人事停滞の大学では一足先に、高齢化に伴う研究教育の無気力化という現象が始める頃でもある。この難局を乗り切るには、昔、壮年と言われていた世代がもう一度、青年もしくは少年の精神構造を持つ必要があるのではないか。若々しさとは自分の人生を大切に楽しもうとする情熱にあるように思う。研究一筋の人は、失敗の予測される研究に挑戦するのもよし。何も論文の数がすべてではない。自分の可能性を信じる人は、趣味にうつつをぬかすのもよし。馬鹿らしいことに情熱を燃やすのも若々しさ。まったく別の研究テーマを持つのもよし。人間頭脳というコンピューターに蓄えてきたプログラムをクリアーし、新たなプログラムを作り始める勇気を持とう。努力すれば、結果は自ずからついてくる。“Let it be”でビートルズは歌う。「あるがままに。そのうち世の中はあなたの思うようになる。」

情熱だ、努力だと叫んでいるうちに私はかなり興奮してきた。暑い。とにかく暑い。……。「お父さん」という息子の一声で目がさめた。「風あげやろう。」と息子。「よし、やろう。」今年からもう一度若返えるぞ。寒風の冬空を見上げる私の耳元を大学の先輩のつぶやきが横切った。「研究ばかりしていて今まで気がつかないけど、音楽っていいねえ。どうしてこんなに心を和やかにしてくれるのかなあ。」